

# 国語問題

## 注意事項

1. 試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題の冊子は 28 ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
3. 問題冊子および解答用紙が配布された後、解答用紙の所定欄に座席番号・氏名を正確に記入し、座席番号についてはその番号を正しくマークしてください。
4. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に正しくマークしてください。マーク箇所を誤った解答は無効です。
5. マーク解答欄記入上の注意

- (1) 解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないでください。例えば、**20** と表示のある問いに対して、**③**と解答する場合には、次の例のように**解答番号 20**の**解答欄**の**③**にマークしてください。

例

良い例	悪い例	解答欄															
		解答 番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15		

- (2) 複数の解答がある場合も、同じ解答欄にマークしてください。ただし、指示された解答数より多くマークした場合は、その解答はすべて不正解となります。
  - (3) 解答用紙へのマークはすべてHBのシャープペンシルまたは鉛筆で行い、訂正する場合にはプラスチック製消しゴムで丁寧に消し、消しきずはきれいに取り除いてください。
  - (4) 解答用紙は絶対に汚さないでください。また折り曲げたり破ったりしないでください。
  - (5) 解答欄の所定欄以外の余白部分は、何も記入しないでください。記入したり、汚したりすると解答用紙読み取り時の誤読の原因となり、採点できない場合があります。
6. 試験時間中に退場することはできません。
  7. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。
  8. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。

I 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

意味や目的をことさら問わずにはいられない時代というのは、その底流のところ、じつは自分たちの生きる意味や目的が感じられない空虚な気分が流れていることを示している。したがって、人生の意味や目的について一般的・哲学的に考えようとすることは、それだけを取り出してみればいかにも高尚な、推奨されるべき営みのように思えるが、私の考えでは、それは必ずしもただ単純に、だれもが、どんな社会でも取り組まなくてはならない営みとは言えないのである。

というのも、大多数の人間がそういう空虚感を抱くいとまなどのない、建設的な活気のある社会や、差し迫った社会的政治的問題（明瞭な貧困や抑圧や差別や秩序の混乱）の解決を迫られている社会、また逆に、意味や目的を問う必要性を感じさせないような、安らかな秩序のうちにじつとまどろんでいる社会というものもあるからだ。こういう社会では、「人は何のために生きるのか」といった問いは必ずしも切実感を持たない。つまり、人生の意味や目的について一般的・哲学的に考えようとすることは、私たちの時代や社会がそれを否応なく要求しているという必然性に照らしてこそ、大きな意味のある営みであるということになる。

(中略)

「意味」とか「目的」とか「～のために」という観念は、人が現にとっている行動や表現と、その向かう終局点との間の距離を、何らかの理由で意識せざるをえなくなった時に発生する。バスに乗り遅れまいと懸命に走っている人は、たとえば走りながら疲れを感じて、その走りの過激な様子にふと疑いを抱いてしまった時などに、「自分はいったい何のために走っているのか」ということを意識する。 **A**、めでたく間に合って努力が報われたと喜ぶ時などに、「何のために走ったか」が意識され、意識されると同時にこの問いが満たされるのを感じる。このように、意味や目的の意識とは、ある行動や表現の外側に出て、それらをその終局点の見地から対象化し、他の行動や表現に関連づけることである。

だが人間は、自己意識を極端に発達させた動物である。自分の行動や表現にまつわる意識や感情を積み重ねて意識の次元を高次化させ、いわば意識についての意識とか、感情についての意識といったものを獲得してしまった。この場合に即して言い換えると、人間は、「意味」や「目的」の意識それ自体を独立して心の対象として扱うことを覚えてしまった。

さてこうなると、「意味」や「目的」は、自分の身体的、\*せいせつな利那的な行動範囲を超えたあらゆる観念の対象に適用することができる。人は、至る所

に「これには何の意味があるのか」「これは何の目的で行われるのか」というようなセンサクのまなざしを投げるようになる。<sup>(ア)</sup>

実際、人間の想像の能力も記憶の能力も巨大なものとなったし、またそのおかげで未来の行動をあらかじめ構成する能力も、身体の届く範囲を超えて飛躍的に拡張された。「意味」や「目的」の意識の自立は、そのことに見合っていたと言えるだろう。そのかぎりではそれは必ずしも不要な拡大ではなかった。**B** 「人生全体」といった包括的な観念に対してまで意味や目的を求めるに至って、そこに一つの転倒が起きたのである。

そのつどの行動や表現をそのつどの意味や目的によってつなぎ合わせた連鎖の体系であるはずの「人生全体」の観念に、人は意味や目的の観念を適用しようとしてしまったのだ。

意味とか目的の意識とかは、本来、そのつどの行動や表現を支える機能を持っていただけであって、「人生」とか「生きる」とかのあまりに抽象的で大きなシャテイ<sup>(イ)</sup>を持った観念に適用するには向かないのである。また、意味や目的の意識とは、行動や表現をその終局点の見地から対象化することであると見なすなら、一方で人生の終局点<sup>(ニ)</sup>が死であることを人間は知ってしまったのであるから、人生全体の意味や目的は死に他ならないということになりかねない。

このように、人生の個々の断面や場面の意味や目的は、人生の内部にだけあってその外に出ることができない。したがって人生全体をその外側の何かに関連づけるような、そういう他の「何か」などは存在することができない。

だから人生そのものに「意味」や「目的」などを求めるのはもともと無理なのであり、要するに人生には「意味」も「目的」もありはしないのである。人生に初めから何か意味や目的があると考えることは人間に特有の、そしてその本性<sup>(三)</sup>にいかにも見合った錯覚である。この事実は論理的には絶対に否定できない。

しかし話はここで終わらない。ここで終わってしまうと、単なるシニシズム<sup>(ニ)</sup>やニヒリズム<sup>(三)</sup>を披瀝<sup>(ヒ)</sup>するだけで、初めの問いの切実さにきちんと答えたことにならないからである。ただ、初めの問いのどこにまずさがあるかだけは、これで明瞭になったと思う。「人は何のために生きるのか」という問いは、論理的にはけっして答えることのできない問いであって、別の形に編み換えられなくてはならない。

ところで先に述べたように、ある行動や表現に意味や目的を問う意識は、次々にその連鎖をたどってゆけば、必ず、自分自身が充足した生を送るためにという究極地点に帰着する。走っているのはバスに間に合う「ため」であり、バスに間に合うようにするのは勤務をきちんとこなすという社会的評価を得る「ため」であり、そうした評価を得たいと願うのは、よりよい生活を支える糧を確保せんが「ため」であり、糧を確保しよう

とするのは、充足した生を送る「ため」である……。これはもちろん一例にすぎないが、他のどんな場合でも同様である。

これに対して、意味や目的の究極地点として、人類が平和共存するために、とか、国家社会が繁栄するために、とか、みんなが少しでも幸せになるためになどのように、一見利他的、大乗的<sup>\*</sup>な見地に立った解答を立てたとしても無駄である。これらの答え方では究極地点とは言えず、さらにその先に、「ではなぜ人類が平和共存したり国家社会が繁栄したりみんなが少しでも幸せになるほうがよいのか、その意味や目的は何か」と問うことができるからである。

しかし、「ある行動や表現の目的は自分自身の生の充足のためである」という答えは究極的であって、その先を求めることができない。「自分自身の生の充足の意味や目的は何か、なぜそのほうがよいのか」という問いは意味をなさない。 **C**、それは「あなたにとってよいことをなぜあなたは目指すのか」という同義反復的な問いに等しいからである。

さてそうだとすると、「人は何のために生きるのか」という問い、つまり人生そのものに意味や目的を見出だそうとする問いのうちには、じつは、人はいかにすれば自分の生を充足させることができるのかを知りたいという動機がひそんでいることになる。

このような問いが今私たちの意識を占領してしまうとしたら、その背景には何があるか。すでに述べたように、個体的には、自我の不安と、その不安を解消して確かな生の方向性を見出だしたいとする願いとが渦巻いており、また社会的には、近代化という一つの時代が終わり、何をよりどころに共通の生き方を選び取ればよいのかわからない過渡的な状態に特有の空虚な気分が支配している。したがって、このような問いの背後にある、生<sup>(4)</sup>の充足を求める感情の要求に応えようとするには、大きな意義がある。

繰り返せば、この人生そのものにあらかじめ与えられた意味や目的などない。ただ私たちは、この世に生を与えられたという既定の事実の下におかれているがために、生きる本能的な意欲に支えられて、そのつど自分を納得させるに足る意味や目的を作り出さざるをえないという条件を背負っているにすぎないのだ。

たしかに人生そのものに意味や目的があるかのように錯覚することは、意味や目的という観念の適用範囲を履きちがえて超越的なものにまで及ぼそうとする、人間特有の困った性癖である。しかし、だからといって、ただ人生には何の意味も目的もないという認識にとどまってニヒリズムの気分を正当化することもまた、生の自然な本能や感情に対するハイシン<sup>(ウ)</sup>であり矛盾である。生の本能や感情は、当たり前前の状態では、いかなる「〜のために」の意識よりも以前に、無意識的な、ひそやかな形で、私たちにに対して常に「生きよ、何かをなせ」と命じている。それは、まだ自

己の存在や世界をカイギ<sup>(エ)</sup>することを知らない幼い子ども<sup>(5)</sup>の自然な生き方を見ればわかることである。

**D**、意味や目的の観念を、具体的な、短距離、短時間内の適切な適用範囲を超えて最も広範囲にまで適用させてしまうのも、一定の精神的発達をとげた人間にとっては逃れられない性向である。そうである以上、生においては、自ら納得しうる意味や目的をいかにうまく虚構するかということだけが問題なのである。

そこで、初めの問いは、次のように言い換えられるべきであろう。

人はいかにすれば自分の生を充足させる意味や目的を作り出すことができるか。

さてこの問いは、新しい困難を生み出してしまったように思える。これにびたりと答えられるような一般的な答えなど、やはりなかなか見つかりそうもないからだ。ただし、これは、ただ単に新しい暗礁<sup>(6)</sup>に乗り上げただけだということではない。ここでは、とりあえず問題をこのような形に変換して、そこから新たに思考を進めることそのものに価値があつたのである。

(小浜逸郎「なぜ人を殺してはいけないのか―新しい倫理学のために―」△P H P 研究所▽)

\*注1 刹那 極めて短い時間、瞬間

2 シニシズム 冷笑主義 社会の風潮・事象などを冷笑・無視する態度

3 ニヒリズム 虚無主義 あらゆる既存の制度や権威などを認めず、すべての価値や真理を否定する考え方

4 大乗的 大乘仏教の利他の精神にのっとっているさま、私情や眼前のことにとらわれないさま

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から、正しい組み合わせになるように漢字を二つ選び、順番は無視して、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア)

(イ)

(ウ)

(エ)

(解答例) ゴウカク

- ① 豪
- ② 核
- ③ 合
- ④ 号
- ⑤ 各
- ⑥ 郷
- ⑦ 剛
- ⑧ 角
- ⑨ 格
- ⑩ 閣

答 ③ ⑨

(ア) センサク

- ① 索
- ② 専
- ③ 削
- ④ 千
- ⑤ 柵
- ⑥ 策
- ⑦ 詮
- ⑧ 潜
- ⑨ 作
- ⑩ 線

(イ) シヤテイ

- ① 舎
- ② 停
- ③ 斜
- ④ 程
- ⑤ 捨
- ⑥ 弟
- ⑦ 者
- ⑧ 貞
- ⑨ 射
- ⑩ 堤

(ウ) ハイシン

- ① 廃
- ② 親
- ③ 配
- ④ 真
- ⑤ 排
- ⑥ 信
- ⑦ 敗
- ⑧ 神
- ⑨ 背
- ⑩ 心

(エ) カイギ

- ① 議
- ② 懐
- ③ 技
- ④ 回
- ⑤ 疑
- ⑥ 解
- ⑦ 戯
- ⑧ 会
- ⑨ 偽
- ⑩ 海

問二 空欄 A・B・C・D に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

5

- |   |   |     |   |      |   |      |   |      |
|---|---|-----|---|------|---|------|---|------|
| ① | A | そして | B | ところが | C | もちろん | D | それゆえ |
| ② | A | しかし | B | また   | C | やはり  | D | ただし  |
| ③ | A | 一方で | B | そして  | C | たとえば | D | また   |
| ④ | A | また  | B | しかし  | C | なぜなら | D | 一方   |
| ⑤ | A | しかも | B | 一方で  | C | すなわち | D | しかし  |

問三 傍線部(1)「人生の意味や目的について一般的・哲学的に考えようとする」とあるが、そのような営みが切実感を持つ社会とはどのようなものか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

6

- ① 安定した秩序の中で人々がすっかり満足して暮らし、さらなる意味や目的を問う必要が生じない社会
- ② 何をよりどころにどう生きて行けばいいのか分からない空虚感に支配された過渡的な状態にある社会
- ③ 貧困や差別などの社会的政治的問題が山積していて、その解決を図るだけで手一杯になっている社会
- ④ 建設的な活気に満ちており、人々が未来に向かってまい進していて、空虚感など抱く間もない社会
- ⑤ 人類が平和共存することや国家の繁栄など、皆が幸せになることを願い努力を続けているような社会

問四 傍線部(2)「不要な拡大ではなかった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

7

- ① 死を終局点とする人生全体に意味や目的を与えることは不可能だと思われたが、意識の高次化を通じてそれが可能になったから
- ② 意識についての意識とか、感情についての意識とか、意識自体を独立して心の対象として扱うことができるようになったから
- ③ 個々の行動や表現とその終局点までの距離を意識することを通じて、個々の行動や表現の意味や目的を考えられるようになったから
- ④ 個々の行動や表現に意味や目的を与えることを超えて、人生全体に対して意味や目的を与えることができるようになったから
- ⑤ 人間の想像や記憶の能力を大幅に高め、未来の行動をあらかじめイメージ化する能力を大きく伸展させたという点で有益だったから



問五 傍線部(3)「本性」の本文中の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- ① 死を終局点とする人生においては、「人は何のために生きるのか」という問いには答えを得ることは絶対にできないが、それでも、どこかにその答えを求めてしまうという性質
- ② 意味や目的という観念を、具体的である自分の身体に関わる瞬間の行動という本来の適用範囲を超えて、広範囲に抽象的なものにならざるで適用しようとする性質
- ③ 自らの行動や表現において、「何のために行うのか」という問いを意識するとともに、終局点に視点を置くことを通じて意味や目的を意識し、問いに答えを与えようとする性質
- ④ 人生全体の意味や目的を人生の外側の何かに求めていながらも、人生の個々の場面において、その意味や目的を自らの人生の内部に求めてしまう性質
- ⑤ 想像する能力や記憶する能力を伸長させて、身体の届く範囲を超えて、未来の行動を模擬的に構成し、終局点に向かう時空の中に自らを位置づけようとする性質

問六 傍線部(4)「生の充足を求める感情の要求に応えようとすることには、大きな意義がある」と筆者が考えるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

- ① 具体的な身体的・瞬間的な行動や表現を超えて、人生全体の意味や目的を抽象的・超越的な何かに関連付けようとするのは人間の本性であるから
- ② 人生全体の意味や目的を作り出すことは人間の避けられない性向である以上、自ら納得しうる人生の意味や目的を虚構することが極めて重要であるから
- ③ ニヒリズムにひたって人生には何の意味も目的もないと認識するにとどまるというのは、生の自然な本能や感情に対する裏切り行為に他ならないから
- ④ 我々が置かれた時代や社会の不安や空虚感の中では、個々の行動や表現において自分を十分に納得させる意味や目的を作り出さざるをえないから
- ⑤ 人生の終局点が死であることを人間は知ってしまっており、意味や目的を作り出さなければ、「無」に向って生きるということになってしまうから

問七 傍線部(5)「幼い子どもの自然な生き方」の本文中の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

10

- ① 個々の行動や表現において、そのつど自分を納得させるに足る意味や目的を作り出していく生き方
- ② 人生には何の意味も目的もないという認識に立って、本能や感情の赴くままに行動する生き方
- ③ 両親の愛情という安らかな秩序の中でただまどろんで、意味や目的に思いも及ばない生き方
- ④ 自分の身体的・瞬間的な行動を、そのつどその行動の終局点から意義づけていく生き方
- ⑤ 生きる意味など考えず、生の自然な本能や感情が命じるままに素直に行動する生き方

問八 傍線部(6)「暗礁に乗り上げた」の本文中での意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

11

- ① 困難に突然直面してしまったが、その原因が分からなかった。
- ② いきなり困難の中に放り込まれて、ただ途方に暮れた。
- ③ 思いがけない困難にあって、先に進むのが困難となった。
- ④ 直面している困難を乗り越えるための土台を獲得した。
- ⑤ 解決困難な問題を一時棚上げして、新たな道を模索した。

問九 本文の内容と一致するものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

12

- ① 意味や目的を作り出すことなく、生の本能や感情の無意識的な「生きよ、何かをなせ」という命に素直に従って生きることが人間の自然な生き方である。
- ② 個々の具体的な行動や表現においてその意味や目的を見出すことはできても、人生そのものに抽象的な意味や目的を見出すことは絶対に不可能である。
- ③ 個々人が不安を抱え、社会が空虚感に満ちた現代においては、人生に普遍的な意味や目的を見出して生を充実させていくことに大きな意義がある。
- ④ 人生の終局点が死であることを人間は知っているのであるから、個々の行動や表現にも、人生全体にも、何らかの意味や目的を見出すことはできない。
- ⑤ 人生の意味や目的を見出すことによって自分の生を充実させるのではなく、自分の生を充実させることができる意味や目的を考えるべきである。
- ⑥ 人類の平和共存、国家社会、みんなの幸せといったものが、「いかにすれば自分の生を充足させることができるか」という問いに対する究極の答えである。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

この文章は夏目漱石の『明暗』の一部である。津田は、清子との結婚を望んでいたが、結婚間際に、清子は理由も告げぬままに突然他の男と結婚してしまった。津田は、心の奥に片付かぬ思いを抱えたまま、現在の妻延子（お延）と結婚した。一方、延子は自分の意志で津田を選び結婚した。津田は入院し、痔の手術を受けたところであり、延子も津田に付き添って病院にいる。

診察室を出るとき、後から随いて来た看護婦が彼に訊いた。

「いかがです。気分のお悪いような事は御座いませんか」

「いいえ。——蒼い顔でもしているかね」

自分自身に多少懸念のあった津田はこういつて訊き返さなければならなかった。

創口<sup>きずぐち</sup>に出来るだけ多くのガーゼを詰め込まれた彼の感じは、他が想像する倍以上に重苦しいものであった。彼は仕方なしにのそのそ歩いた。それでも階子段<sup>はしごだん</sup>を上る時には、割かれた肉とガーゼとが擦れ合<sup>こす</sup>ってざらざらするような心持がした。

お延は階段の上に立っていた。津田の顔を見ると、すぐ上から声を掛けた。

「済んだの？ どうして？」

津田ははつきりした返事も与えずに室<sup>へや</sup>の中に這<sup>はい</sup>入った。其所には彼の予期通り、白いシートに裏まれた蒲団<sup>ふとん</sup>が、彼の安臥<sup>あんが</sup>を待つべく長々と延べてあった。羽織を脱ぎ捨てるが早い、彼はすぐその上へ横になった。鼠地<sup>ねずみじ</sup>のネルを重ねた銘仙<sup>めいせん</sup>の襦袢<sup>じゆばん</sup>を後から着せるつもりで、両手で襟の所を持ち上げたお延は、拍子抜けのした苦笑と共に、またそれを袖畳<sup>そでたた</sup>みにして床<sup>とこ</sup>の裾<sup>すそ</sup>の方に置いた。

「お薬は頂かなくっていいの」

彼女は傍<sup>そば</sup>にいる看護婦の方を向いて訊いた。

「別に内用のお薬は召し上らないでも差支<sup>さしつかえ</sup>ないので御座います。お食事の方はただ今拵<sup>こしら</sup>えてこちらから持って参ります」

看護婦は立ち掛けた。黙って寐<sup>ね</sup>ていた津田は急に口を開いた。

「お延、お前何か食うなら看護婦さんに頼んだらいいだろう」

「そうね」

お延は躊躇した。

「あたしどうしようかしら」

「だって、もう昼過ぎだろう」

「ええ。十二時二十分よ。貴方の手術は丁度二十八分掛ったのね」

時計の蓋を開けたお延は、それを眺めながら精密な時間をいった。津田が手術台の上で(a) 俎へ乗せられた魚のように、大人しく我慢している間、お延はまた彼の見詰めなければならなかった天井の上で、時計と睨めつ競でもするように、手術の時間を計っていたのである。

津田は再び訊いた。

「今から宅へ帰ったって仕方がないだろう」

「ええ」

「じゃ此所で洋食でも取ってもらって食ったらいいじゃないか」

「ええ」

(2) お延の返事は何時まで経っても捗々しくなかった。看護婦はどうとう下へ降りて行った。津田は疲れた人が光線の刺戟を避けるような気分で眼をねむった。するとお延が頭の上で、「あなた、あなた」というので、また眼を開かなければならなかった。

「心持が悪いの？」

「いいや」

念を押したお延はすぐ後をいった。

\*4 「岡本でよろしくって。いづれその内御見舞に上りますからって」

「そうか」

津田は軽い返事をしたなり、また眼をつぶろうとした。するとお延がそうさせなかった。

「あの岡本でね、今日是非芝居へ一所に来てっていうんですが、行っちゃいけないって」

気の能く廻る津田の頭に、今朝からのお延の所サが一度に閃めいた。(ア) 病院へ随いて来るにしては派出過ぎる彼女の衣裳といい、出る前に日曜だと断った彼女の注意といい、此所へ来てから、そわそわして岡本へ電話をかけた彼女の態度といい、(3) 悉く芝居の二字に向って注ぎ込まれていくようにも取れた。そういう眼で見ると、手術の時間を精密に計った彼女の動機さえ疑惑の種にならないでは済まなかった。津田は黙って横を向いた。床の間の床の上に取り揃えて積み重ねてある、封筒だの書翰用紙だの、封筒だの書翰用紙だの、封筒だの書物だのが彼の眼に付いた。それは先刻靴へ入れて彼が此所へ持つて来たものであった。

「看護婦に小さい机を借りて、その上へ載せようと思ったんですけれども、まだ持つて来てくれないから、しばらくの間、ああして置いたのよ。本でも御覧になって」

お延はすぐに立って床の間から書物を卸した。

津田は書物に手を触れなかった。

(4) 「岡本へは断ったんじゃないのか」

不審よりも不平な顔をした彼が、向を変えて寐返りを打った時に、堅固に出来ていない二階の床が、彼の意を迎えるように、(b) ずしんと鳴った。

「断ったのよ」

「断ったのには是非来いっていいのかね」

この時津田は始めてお延の顔を見た。けれども其所には彼の予期した何物も現われて来なかった。彼女はかえって微笑した。

「断ったのには是非来いっていいのかよ」

「しかし……」

彼はちよつと行き詰った。彼の胸にはいうべき事がまだ残っているのに、彼の頭は自分の思わく通り迅速に働いてくれなかった。

「しかし——断ったのには是非来いなんていうはずがないじゃないか」

「それをいうのよ。岡本もよっぽどの没分曉漢ね」

津田は黙ってしまった。何と行って彼女を追究していいか見当が付かなかった。

「貴方まだ何かあたしを疑ぐっていらっしやるの。あたし厭だわ、あなたからそんなに疑ぐられちゃ」

彼女の眉がさもさも厭そうに動いた。

「疑ぐりやしないが、何だか変だからさ」

「そう。じゃその変な所をいって頂戴な、いくらでも説明するから」

不幸にして津田にはその変な所が明瞭にいえなかった。

「やっぱり疑ぐっていらっしやるのね」

津田ははつきり疑っていないといわなければ、何だか夫として自分の品カクにかかわるような気がした。といつて、女から甘く見られるのも、彼に取って少なからざる苦痛であった。二つの我が我を張り合つて、彼の心のうちで闘う間、余所目に見える彼は、比較的冷静であった。

「ああ」

お延は微かな溜息を洩らしてそつと立ち上つた。一タン閉て切つた障子をまた開けて、南向の縁側へ出た彼女は、手摺の上へ手を置いて、高く澄んだ秋の空をぼんやり眺めた。隣りの洗濯屋の物干に隙間なく吊されたワイ襯衣だのシーツだのが、先刻見た時と同じように、強い日光を浴びながら、乾いた風に揺れていた。

(5) 「好いお天気だ事」

お延が小さな声で独りごとのようにこういった時、それを耳にした津田は、突然籠の中にいる小鳥の訴えを聞かされたような心持がした。弱い女を自分の傍に縛り付けて置くのが少し可哀想になった。彼はお延に言葉を掛けようとして、接穂のないのに困った。お延も欄干に身を倚せたまま、まずぐ座敷の中へ戻つて来なかつた。

其所へ看護婦が二人の食事を持って下から上つて来た。

「どうもお待遠さま」

津田の膳には二個の鶏卵と一合のソップと麵麩が付いているだけであった。その麵麩も半斤の二分ノ一と分量は何時のまにか定められていた。津田は床の上に腹這になつたまま、むしゃむしゃ口を動かしながら、機会を見計らつて、お延にいった。

「行くのか、行かないのかい」

お延はすぐ肉匙の手を休めた。



(6) 「あなた次第よ。あなたが行けと仰おつゃれば行くし、止せと仰よゃれば止すわ」  
「大変柔順なだな」

「何時でも柔順なだわ。——岡本だつてあなたに伺うつて見た上で、もしいいと仰おつたら連れて行つて遣やるから、御病ご氣が大した事ことでなかつたら、訊きいて見ろつていうんですもの」

「だつてお前まへの方かたから岡本へ電話を掛けたんじゃないか」

「ええそりやそうよ、約束やくそくですもの。一返断へんつたけれども、模様次第ばようでは行けるかも知れないだろうから、もう一返その日の午ひるまでに電話で都合ぐあひを知らせろつていつて来たんですもの」

「岡本からそういう返事へんじが来たのかい」

「ええ」

しかしお延はその手紙を津田に示していなかった。

「要するに、お前はどんなんだ。行きたいのか、行きたくないのか」

津田の顔色を見定めたお延はすぐ答えた。

「そりや行きたいわ」

「とうとう白状はくじやうしたな。じゃお出いでよ」

二人はこういう会話と共に午飯ひるめしを済しましました。

\*注1 ネル フランネルの略で毛織物の一種

2 銘仙 絹織物の一種

3 襦袍 普通の着物よりも大きめに作った綿入れで広袖の着物

4 岡本 延子の叔母の嫁ぎ先。延子は、親の暮らす京都から出て来て、女学校時代を岡本の家で過ごし、そこから津田のところへ嫁いだので、実際上の実家のような関係になっている。なお、経済的に苦しい状況にある津田の入院費用は、津田が実家と不仲であることから、岡本から出ている。

5 接穂 話を続ける機会、話のきっかけ

6 ソップ スープ (soup)

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)のカタカナ部分は漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑤の中から同じ漢字を使っているものを一つ選び、その番号をマークしなさい。

(ア)

(イ)

(ウ)

(解答例) カイ散

- ① 議会
- ② 改札
- ③ 限界
- ④ 曲解
- ⑤ 未開

答 ④

(ア) 所サ

- ① 茶道
- ② 調査
- ③ 示唆
- ④ 差配
- ⑤ 作用

(イ) 品カク

- ① 核心
- ② 地殻
- ③ 輪郭
- ④ 格闘
- ⑤ 内閣

(ウ) 一タン

- ① 先端
- ② 元旦
- ③ 単純
- ④ 探検
- ⑤ 生誕

問二 傍線部(a)・(b)の本文中での意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)

(b)

(a) 組へ乗せられた魚のように

- ① 相手の策に乗ってしまったのを悔やむ状態
- ② 相手を信頼しきって身も心もゆだねた状態
- ③ 相手の手から逃れようともがいている状態
- ④ 相手のなすがままになるよりほかない状態
- ⑤ 絶望に打ちひしがれて身動きできない状態

(b) 意を迎えるように

- ① 不満をなだめるかのように
- ② 気持ちに合わせるかのように
- ③ 不安をあおるかのように
- ④ 喜びを受けとめるかのように
- ⑤ 心をまどわすかのように

問三 傍線部(1)「時計と睨めっ競でもするように、手術の時間を計っていたのである」とあるが、これはお延のどのような状態を表しているか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

18

- ① 津田の手術があまり長くかかれば芝居に行く予定の時間に間に合わないのではないかと気がかりに思っている状態
- ② 津田の容体が心配で、手術が早く終わることを祈っているにもかかわらず、時間の進みが遅いことにイライラしている状態
- ③ 津田が苦しむ痔がどれほど大変な病気かピンとこないのが、手術にかかった時間でそれを判断しようと懸命になっている状態
- ④ 手術の後、岡本と芝居に行く約束になっているが、それを喜ばない津田に対し、時間までにどう切り出そうかと思悩んでいる状態
- ⑤ 手術に要した時間により術後の経過が変わることから、手術の時間をできるだけ正確に知ろうとする献身的愛情に満ちた状態

問四 傍線部(2)「お延の返事は何時まで経っても捗々しくなかった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

19

- ① お延がずっと付き添うつもりだという前提で津田が話しかけるので、芝居に行くことを切り出せないでいるから
- ② そのまま津田のそばに付き添っているか、岡本との約束どおり芝居に行くか、なかなか決心がつかかかっているから
- ③ 津田の手術がうまくいったのかどうかを気にするあまり、精神的に疲れ果てて、まったく食欲がわいてこないから
- ④ 家へ帰ってゆつくり好きなものを食べたいと思っていたのに、あまり好きでない洋食を津田が勧めるから
- ⑤ 芝居に行きたいという自分の気持ちをよくわかっていながら、津田がことさらに引き留めるようなことを言うから

問五 傍線部(3)「悉く芝居の二字に向って注ぎ込まれているようにも取れた」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

20

- ① その日の朝からのお延の行動はすべて、お延を芝居に連れて行きたい岡本の筋書きに沿った演技だったのではないかと津田には思われたということ
- ② 芝居に行きたいという本心を隠すために、お延が一生懸命津田の気持ちおもんはかを慮おぼっているような振りをしているように津田には思われたということ
- ③ 日曜日に派手すぎる衣装を着て津田の手術に付き添おうとするお延の行動が、すべて芝居がかったもののように津田には思われたということ
- ④ 自分への付き添いは二の次で、お延が芝居へ行くことだけに集中して、着々と準備を整えてきたのではないかと津田には思われたということ
- ⑤ 今朝からのお延の行動が、すべてお延にとって都合のよい判断をさせるために仕組まれた芝居であったように津田には思われたということ

問六 傍線部(4)「岡本へは断つたんじゃないのか」とあるが、この時の津田の気持ちはどのようなものであったか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

21

- ① お延が岡本からの誘いを断ったはずなのに、またしても誘ってきた岡本の執拗しつようさに対して不満や怒りを覚えている。
- ② 岡本からの誘いを断ったと言ったのに、やはり芝居見物に行こうとするお延の矛盾を追及したいと思っている。
- ③ お延が手術を終えたばかりの夫の看病より、芝居見物の予定を優先させようとすることを不満に思っている。
- ④ お延に津田の看病を放棄してまで芝居見物に来いと言ってくる岡本の真意がどこにあるのか測りかねている。
- ⑤ 岡本とのやりとりに関しては、お延が自分に対して嘘をついているのではないかと疑い、不安を抱いている。

問七 傍線部(5)「好いお天気だ事」とあるが、この言葉を耳にした津田はどのようなことに気づいたのか。その内容として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

22

- ① いつも夫のおもわくに気をつかい、自分の意思を押し殺して生きていように見えるお延だが、本心では夫婦関係を解消したいと願っていることに気づいた。
- ② 何でも自分の意思を押しとおそうとするお延であるが、意外にも晴れわたった空の美しさを感じとるような繊細さをもっていることにはじめて気づいた。
- ③ 結婚して独立したにもかかわらず、いつまでも保護者然として自分たちの意に従わせようとする叔母夫婦にお延が苦しめられているということに気づいた。
- ④ 妻の関心がいつも自分だけに向いていて、何事であれ自分の気持ちを推し量って動くのが当然であると考える夫に不満を感じているお延の気持ちに気づいた。
- ⑤ ほしいままにふるまっているように見えるお延ではあるが、やはり世間や夫の前では体裁を繕わなければならないという束縛を受けていることに気づいた。

問八 傍線部(6)「大変柔順だな」と言った時の津田の気持ちとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

23

- ① 津田は、お延が夫である自分より岡本の意に従おうとすることに強い不満を感じていた。ところが、そのお延が今回は意外にも自分に判断をゆだねたので大変驚いている。
- ② お延は、夫の気分を害しないように付き添いを続けるか岡本に気に入られるように芝居に行くかで迷っている。そこで、判断をゆだねられた津田は、いつものお延らしくないところからかっている。
- ③ お延が、内心は行きたくて仕方がないし、行くなと言われれば不満に思うことはそれまでの様子から明白である。しかし、表面上は津田の意思次第であるかのように言うことをからかい、皮肉っている。
- ④ 行きたくて仕方がないというのがお延の本心であることはよくわかっていた。それにもかかわらず最終的に津田の判断にゆだねたことから、自分の意思を尊重してくれたことに満足し、ほめている。
- ⑤ お延が内心では芝居には行きたいと思っても、夫が自分の身勝手さを非難し、憎むのではないかという恐れを抱いている。それがわかるので、いじらしさを感じ、それを伝えようとしている。



問九 本文全体を通読して、作者は、津田とお延をどのような夫婦として描いていると思われるか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

24

- ① 夫婦それぞれに相手のことを気遣い、自分の都合よりもまず相手の都合を優先させようとしており、それによって平穏で安定した理想的な夫婦関係を築いている。
- ② 夫婦がお互いのことに無関心で、自分の意思や欲望に忠実に行動するが、そのかわりお互いの自主性や自由を尊重し、できるだけ相手を束縛しないように気をつけている。
- ③ 夫婦お互いがどのような状況におかれていても、それには構わず、まず自分の欲求の充足を第一として行動し、さまざまな手段を使ってでも相手を自分の意のままに操りたいと思っている。
- ④ 夫も妻も、相手を思うより自分の我を通したがっているが、ありのままの自分をさらけ出そうとせず自分をもの分かりのよい夫、従順な妻として相手にみせようと取り繕っている。
- ⑤ 妻に対していいことがあってもそれを口にできない気弱な夫と自分が夫にどのように思われようと一切気にせず自由奔放にふるまう勝ち気な妻の取り合わせだが、それがかえって円満な夫婦関係をつくっている。

Ⅲ 以下のそれぞれの設問に答えなさい。

問一 次の(1)～(3)に示した熟語の対義語を完成するために、解答例にならない、それぞれ①～⑧の中から正しい組み合わせとなるものを二つ選び、  
 順番は無視して、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(1)

(2)

(3)

(解答例) 拡大 ↑ ↓

- ① 小
- ② 尺
- ③ 縮
- ④ 弱
- ⑤ 減
- ⑥ 贈
- ⑦ 刷
- ⑧ 少

(1) 炎暑 ↑ ↓

- ① 暖
- ② 涼
- ③ 天
- ④ 寒
- ⑤ 雨
- ⑥ 蔽
- ⑦ 気
- ⑧ 温

(2) 普遍 ↑ ↓

- ① 立
- ② 偏
- ③ 殊
- ④ 在
- ⑤ 反
- ⑥ 孤
- ⑦ 目
- ⑧ 特

(3) 収縮 ↑ ↓

- ① 慢
- ② 張
- ③ 展
- ④ 開
- ⑤ 肥
- ⑥ 進
- ⑦ 膨
- ⑧ 出

答 ① ③

問二 次の(1)～(3)の四字熟語の空欄に入る漢字を、解答例にならない、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

(2)

(3)

(解答例) 三  四温

- ① 漢
- ② 乾
- ③ 甘
- ④ 寒
- ⑤ 閑

(1) 五里  中

- ① 無
- ② 夢
- ③ 霧
- ④ 六
- ⑤ 務

(2) 同  異夢

- ① 症
- ② 床
- ③ 承
- ④ 将
- ⑤ 小

(3) 千  一遇

- ① 歳
- ② 災
- ③ 財
- ④ 載
- ⑤ 在

答 ④

問三 次の(1)・(2)のことわざの意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1) 

31
----

(2) 

32
----

(1) 他山の石

- ① どんなものも、使い方で、役に立つか立たないかは決まること
- ② 他人のすばらしい言行は、自分の手本とすべきであること
- ③ 他人のつまらない言行も、自分を高め育てる参考となること
- ④ どんなものでも他人のものはすばらしく見えてしまうこと
- ⑤ 他人にとっては大変なことでも、自分には無関係であること

(2) 気が置けない

- ① 相手の悪意や害意を感じ取って、油断しないで身構えていること
- ② 相手に対して気を使ってしまい、親しく接することができないこと
- ③ 何を考えているのか分からないために、相手の様子を注視していること
- ④ 相手に遠慮したり気遣ったりする必要がなく、心から打ち解けられること
- ⑤ 怪しく疑わしい所があって、相手を簡単には信用することができないこと

問四 次の(1)・(2)に示した文章の中で、敬語表現が適切でないものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1) 

33
----

(2) 

34
----

(1)

- ① どうぞ、近い内に、拙宅にもお越しください。
- ② 後ほど改めて、上司とともにお詫びに参上致します。
- ③ 本日は、当劇場へ、ようこそお運びくださいました。
- ④ 支店長がお留守の時、社長が支店に伺われました。
- ⑤ 今入口にいらっしゃった方が英語の先生です。

(2)

- ① お客様には前もってご予定をお知らせいたします。
- ② 先ほどご教示いただいたことを肝に銘じます。
- ③ あの方にはどうぞよろしくお伝えください。
- ④ 大勢の人の前でお話するのは緊張しますね。
- ⑤ お客様が申される通り、こちらに非があります。





